

教育活動としての学生相談 —保健管理センター学生相談室における 教育と研究—

杉江 征, 佐藤 純
心理学系助教授 心理学系講師

はじめに

学生相談室は、現在保健管理センターに属しており、大学の組織上は研究・教育機関ではない。しかしながら、学生相談室の活動は、保健・医療の枠組みだけではなく、広く大学教育の一環としてとらえることが出来る。これは、2000年に報告された文部科学省高等教育局の『大学における学生生活の充実方策について』(大学における学生生活の充実に関する調査研究会報告)においても示されているところであり、新制大学の発足とともに始まった学生相談における一貫したテーマでもある。ここでは、学生相談担当者の私見としてではあるが、学生相談室における教育と研究について論を起したいと思う。

教育活動としての学生相談

学生相談室の活動が大学教育の一環であると聞いて、違和感を覚える方もい

らっしゃるかもしれない。大学が教育機関であり、その中心的役割の一つが「人を育てる」ことにあるのなら、学生相談も一つの教育活動と考えることができよう。このことは、学生相談室における実際の活動を説明することによって、よりご理解頂けるのではないかと思う。

一般に、学生相談室に対して持たれているイメージは、個別面接による悩み相談、カウンセリングというものではないだろうか。実際、個別面接による相談には大変多くの時間を割いており、昨年1年間(2002年度)の相談件数は延べ2000件弱である(年々増加傾向にある。ここ10年間で倍増!)。相談内容は、修学や進路の問題から、心身の不調、友達や教員との関係、研究室の事柄に至るまで様々な問題が持ち込まれてくる。そのような相談に対して、学生相談では、相談室という「特別な空間」の中で学生が自己を見つめなおし、自分の考えをまとめ

でいく過程に付き添いながら、また学生が自分で「日常の学生生活」に戻り生活できるようになるのを見守っていく。学生が直面した問題の解決や、心理的な問題の治療を行うことも重要であるが、学外の相談機関における心理療法やカウンセリングとは異なる「学生相談」の要は、学生が自らの力で自らの問題に対して自らが納得できる対処ができるようになること、つまり「学生の成長」を目標としている点にあるのではないと思われる。

また、学生相談室では、自己開発のための合宿セミナー（構成的エンカウンターグループ）を毎年開催し、就職活動のためのキャリアグループ（自己分析）を随時行っている。これらの活動の目的は、学生の知識やスキルの学習の促進、青年期にある大学生の発達援助である。これらの活動に参加する学生や院生の多くは、特に深刻な「心理的問題」や「悩み」を抱えているわけではない。現在または将来の生活をより満足したものに近づけるためにどうしたらよいか、自ら積極的に考え活動している学生たちである。このような学生たちに何かこれからの人生で役に立つ「武器」を提供すること、つまり「学生の飛躍」の援助を行うのも学生相談の重要な活動であると考え

ている。

ここまで学生相談室の活動について説明し、その活動の一端をご理解頂けたのではないかと思う。学生相談活動とは、学生の人間的な成長、発達を援助する教育活動である。

「これまで、学生相談機関は、問題のある一部の特別な学生が行くところというイメージが根強くあったが、本来、学生相談は全ての学生を対象として、学生の様々な悩みに応えることにより、その人間的な成長を図るものであり、今後は、学生相談の機能を学生の人間形成を促すものとして捉え直し、大学教育の一環として位置づける必要がある。」これは、冒頭で触れた『大学における学生生活の充実方策について』において、学生相談の今後の改善方策として述べられた一文である。しかしながら、これは学生相談に限ったことではないであろう。大学、大学院が最高学府として位置づけられ、長きにわたる教育の最後の仕上げをする教育機関であると捉えるならば、知識、技能的な側面だけでなく、人間的な成長という側面も含めた教育を大学全体で行っていくことが必要であり、義務であろう。

コミュニティ活動としての学生相談

大学を一つのコミュニティとみなし、学生相談の立場から大学コミュニティに働きかけを行い、大学全体の教育環境の改善をはかることを目的とした活動である。学生相談室の利用者が年々増加しているという傾向は、他の大学でも報告されている一般的な傾向でもある。これらの状況に対する説明として、学生の変化が挙げられることが多い。しかし、別の見方として、大学の教育力が低下してきたという論もある。教員は研究業績を中心に評価されている。最近では、教育業績も取り上げられるようになってきているが、教員が個々の学生に個別に援助していても、それを表現し、評価する手段がないのが実情である。それよりも、論文を何本書いたかがやはり評価として前面になってしまう。学生と対面した時間と労力をもとに、その学生の成長を「成果」として表現することは極めて難しい。このような現状の中で、さまざまな広報活動や教職員へのコンサルテーション、ファカルティー・ディベロップメントへの協力など、大学全体の教育力向上のためのコミュニティ活動も重要な役割となってくる。また、学生相談室では個々の学生のケースを通して大学の様々な実情が浮き彫りになってくる。学生相

談室は、ある意味、学内のアンテナハウスのような特徴がある。これらの知見を大学運営へフィードバックしていくこともコミュニティ活動の一つである。

学生相談のモデルに関しては、下山(1991)の中で「統合システムモデル」というものが検討されている。これは、大学組織(システム)において、学生集団や教官システム、事務官システム、医療システムなどの間(ハザマ)で、学生相談の組織的間(ハザマ)性を利用して、ソーシャル・サポート・ネットワークを形成していくというモデルである(図1参照)。学生相談活動を「機能」として考え、その必要とされる活動を、学内の各部署と連携を取りながら実現していく上で参考となるモデルであると思わ

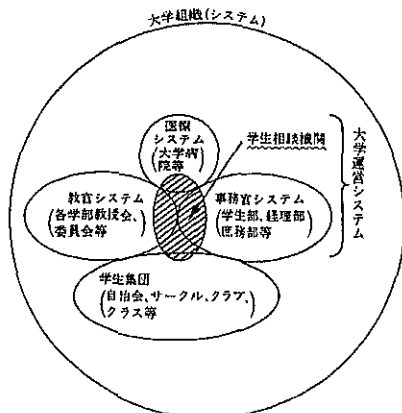


図1 大学システムの構成と学生相談機関の位置づけ(下山, 1991)

れる。

研究活動としての学生相談

学生相談における研究活動としては、大きく分けて3つの領域が挙げられる。一つは、青年期にある大学生に関する研究である。もう一つは、効果的な学生支援の方策の開発やカウンセリングや心理療法に関する研究である。3つ目は、大学教育そのものについて学生相談の立場から検討していくことである。これらの3つの領域は、それぞれ独立したものでなく、相互に関連している。

多様な大学生や大学院生が入学してきている現在、高等教育機関としての大学が、入学してくる学生にあわせた教育活動を行うことが求められている。学生相談室では、実際に目の前にいる学生の様相や大学の諸状況などが、学生の相談を通して見えてくる。それゆえ、高等教育を考える上でも、効果的な大学教育や学生相談活動を行っていく上でも、その知見を集積していくとともに、その専門性も高めていく必要があると思われる。

おわりに

学生が語ることを「大学人」として、あるいは若者が語ることを「先輩の大人」として、学生ときちんと対面して聴

くということが、学生相談の原点でもあるように思える。これは、本来教育に携わる大学の教職員全体の役割であろう。人を育てるということは本来手間とひまのかかることである。しかしながら、大学は競争的な環境に置かれ、高度な研究成果や大学運営の効率化が求められている。その中で基本的な教育を行っていくことは、限られた学内資源をどのように配分し、システムを構築していくか、大学の実情や目指すところにあわせて、それぞれ知恵を絞らなくてはいけない時であると思われる。

知識を生かせる「人」を、研究を担える「人」を育てるのも大学教育の重要な役割ではないであろうか。それは、研究センターの大学作りを目指すのであれば、なおさらなことであろう。

文献

文部科学省高等教育局（2000）大学における学生生活の充実方策について（報告）。

下山晴彦（1991）これからの学生相談、全国学生相談研究会議（編）現代のエスプリーキャンパス・カウンセリング、至文堂、46-59。

（すぎえまさし 臨床心理学、さとうじゅん 発達臨床心理学）